百々裏話(90)

おもて あきら

◎謡初雑考（その三）

前述した慶長十八年(一六一三)の駿府城の謡初に、観世と並んで梅若が時服を拝領した(徳川実紀)のは、梅若も観世と同様に囃子などを担当したからに相違ないし、後代の例から推して、拝領した時服を身につけて観世大夫と相舞で弓矢立合を舞ったものと想像される。遠隔の地で同日に行われた江戸での謡初を度外視し、駿府の家康の謡初のみについて見ても、徳川家の謡初は観世大夫の独占ではなくなっていたわけである。

右の梅若は、後に玄詳と称した梅若九郎右衛門であろうが、彼が謡初に出勤するようになったのは、観世大夫身愛(後の黒雪)が慶長十五年五月に駿府を出奔して高野山に籠居してしまったためのようである。享和二年(一八〇二)の『梅若家由緒書』(『能楽源流考』九八六頁参照)の玄詳の条に、「同(慶長)十六年正月、観世大夫病気ニ付、御謡初被仰付相勤…」とあるが、「観世大夫病気ニ付」と言うのは、身愛の出奔が表向きは病気という形で処理されていたことを示すもので、身愛不在のため梅若が観世大夫に代って謡初を勤めたものと解される。当時の家康は、金春安照や下間少進らをも厚遇し、しばしば駿府で彼等の能を見ているが、梅若玄詳もまた劣らぬ愛顧を蒙っていた。身愛の出奔自体を家康の梅若贔屓に由来すると推測した記録が存する（当代記）ほどである。かつまた、経緯は明らかでないものの、慶長四年頃から梅若は観世座と行動を共にするようになり、観世大夫の翁の千歳を梅若が勤める慣習が慶長十年代には成立していた。一方では梅若大夫として別個に活動もしていて、いわば観世座の客分的存在でもあったのである。観世大夫の代理として謡初を勤めるのに最もふさわしい位置にいたと言えよう。慶長十六年のみならず、翌年にも梅若は謡初に出勤したものと推測される。そうした実績があったからこそ、慶長十七年二月に観世身愛が許されて帰参した翌年の謡初には観世・梅若の両名が謡初の役務を分担したのであろう。身愛の短気な行動が、徳川家の謡初に観世以外の能役者が進出した一つの契機であったらしい。

観世・梅若両名による謡初が具体的にどのような内容であったか、またどのくらいの間続いたかは明らかでない。『徳川実紀』の元和二年(一六一六)の謡初に関する記事は「去

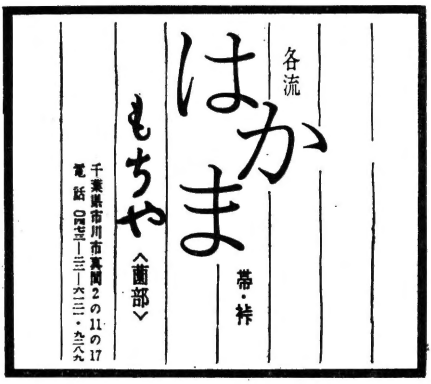
（右頁下段より）

在の演者・観衆の要請によることと思われる。

希わくは、新鮮な目を持った新しい観者よ、充分この曲を堪能の上、あなたなりの見所をめいめいで見つけ出してほしい。「狂言とはこういうもの」という枠などとっぱらって、どんな芽が摘み捨てられ、どんな栄養が補給されたか、鋭敏な触覚でさぐり当ててほしいそれが狂言をこちら（観る）側から育ててゆく。

（一九七二・三・四）

・編集部注―「棒縛」は銕仙一四八号に掲載しました。



年は大坂の再乱により謡曲始の式を停廃ありしが、この春は旧に復し行はる」と始まる詳細なもので、観世左近(身愛)の四海波から老松・東北・高砂の囃子を経て弓矢立合に終る形を伝えているが、あまりにも江戸中期以後の謡初と同じであり過ぎて、後年編集の際の潤色の危惧が感じられ、元和頃の謡初がそうした形態であったとは断じ難いように思われる。観世以外の役者が参加したか否かも不明である。梅若に好意的だった家康が同年四月に歿したことと、梅若の謡初出勤の解消とが結びつく場合も想像されるが、別にそれを思わせる徴候があるわけではない。ただ、徳川家としての謡初が江戸城での催しに限定されたことが、謡初の形式が整備される一つの要因にはなったものと思われる。

前々回に述べたように、寛永・正保の頃、三代将軍家光時代の謡初は、弓矢立合を含む囃子七番を観世と喜多の両大夫が演奏する形であった。(冒頭に観世大夫の小謡四海波があったことと、観世大夫の嫡子が参加する場合もあったことが、享和二年『観世大夫由緒書』から知られる)。喜多が観世と並ぶ役割をになったのは初代の喜多七太夫が将軍家から格別の扇扉を蒙っていたからであろうが、前金剛大夫だった彼が将軍家または幕府から四座なみの待遇を受けるようになったのは、秀忠の時代からである。元和四年正月四日に秀忠に召し出されたという喜多流の伝承はそのままには信じられないが、元和六年に七太夫が江戸で勧進能を興行した頃には、実質的に四座と対等の地位を得ていたかと思われる。『徳川実紀』が謡初を「囃子七番」と記録している寛永元年(元和十年)を数年遡る頃から、七太夫が謡初に参加していた可能性が強いのではなかろうか。注目されるのは、観世と並んで謡初を勤めていた梅若玄詳がその頃に引退したらしいことである。私が探し得た玄詳の演能記録は元和三年までで、元和九年以後は次代の梅若六郎氏久が活躍している。玄詳は歳を越えて間もない頃に隠居したもののようである。七太夫の謡初出勤は梅若玄詳の引退の跡を承けたもので、観世と喜多の両大夫が勤める家光時代の形も、観世・梅若が両名で勤仕した形を継承したものである場合も、十分考えられるのではなかろうか。

但し、七太夫の謡初出勤を番組面で確認できるのは、前々回に紹介したように寛永九年からである。一方『徳川実紀』寛永八年正月二日の条に、「本城謡曲始例のごとし。猿楽喜多七大夫始て御流盃をたまはる。観世大夫は旧例これを給ふ」とあるので、初めての御流盃頂戴を謡初への初参加と一体と見て、七太夫の参加は寛永八年に始まると解することも可能であろう。このあたり、もっと史料を博捜した上でないと断定が困難である。

さて、観世・喜多の両大夫による囃子七番の謡初が、いつから後代の囃子四番(老松・東北・高砂と弓矢立合)の形に変更されたかの問題であるが、番数の点は、『徳川実紀』承応元年(慶安五年。一六五二)の謡初の記事に、観世左近の小謡、老松・東北・高砂三番の囃子、弓矢立合と曲名が明記されていて、この年には後代と全く同じ番数、曲名であったようである。元和二年の記事と同様、後代の潤色の疑いが感じられないでもないが、元和の場合とは違ってその後に異なる形態で謡初が行われた形跡がないし、前年に家光が歿して四代将軍家綱の代になって始めての謡初で、形式を整備した事も考えられるので、元和の記事よりは信頼度が高かろう。前年の西丸での謡初に観世三十郎(重清)が養老を勤めている(享和二年由緒書)から、『徳川実紀』を信ずれば承応元年から老松・東北・高砂・弓矢立合の形になったことになろうが、家光時代の形が一時的なもので、慶長・元和の時代の形に復元したものであることも考えられる。

なお、承応二年に喜多七大夫長能が歿したことや、翌三年から謡初の式日が正月三日に変更されたことも、謡初の内容変更と関連して

いるかも知れないが、明徴は見出せない。

金春・宝生・金剛の三座が交代で謡初に出勤するようになったのは、寛文三年(一六六三)からしい。その前年の五月に春日若宮祭や薪猿楽(四座参勤が原則だったが、観世は謡初出勤を理由に参加せず、三座が参勤していた)への二座交替出勤の制が定まり、それまで両行事参勤のため十一月から二月へかけて奈良滞在を余儀なくされていた金春・宝生・金剛三座の大夫のうち一人は正月も江戸に留まるようになった(徳川実紀等)。享和二年の『観世大夫由緒書』の十世重清の条に、

…寛文元丑年正月三日御謡初之節如レ前父子共相勤、其後金春大夫金剛大夫ヨリ観世大夫与隔年ニ参勤仕、且南都神事能互ニ可二相勤一旨内々奉レ願候由ニ而……

とあるから、謡初への参加を望む金春や金剛から願い出た結果であり、南都への二座交替参勤と同時に、謡初への交替出勤が認められたものと見るべきであろう。『徳川実紀』の寛文二年正月四日の条に、「猿楽の徒十一人、昨日謡曲初の時失儀ありしをもて、厳にいましめらるべしといへども、歳首慶宴の事なれば寛宥せられ…」とあり、寛文二年の謡初に何か失敗があったらしい。そのことが、金春・金剛が前例を破る謡初参加を願ひ出、三座交替出勤の形で許された遠因であるらしい。

お知らせ

★四月の中頃、テアトル・ナシオンの演劇講座に参加のため、観世寿夫・観世栄夫・野村万作・渡辺守章の四氏はパリに約一週間行く予定です。

★「銕仙」は五月に二百号を迎えます。創刊号は、今は舞台だけが青山の銕仙会舞台として残っておりますが、多摩川園の多摩川能楽堂で誕生いたしました。その当時のものは謄写版刷りで、表紙のデザイン・解説その他の記事も銕仙会の演者自身の手でかかれています。勿論能を愛する人たちのご協力も多く見えます。戦後の混乱の中から、能とは何か伝統とは、創造とは、など種々の問題をかかえて、県命に観客とコミニケーションしようとした熱意が、粗末な謄写刷りのはしばしに生き生きと感じられます。

以来二百号まで、多くの方々のご厚意とご協力によって続けてまいりました。そしてなお今日能とは何か、ということは更に多くの問題をはらんで、立ちふさがっております。頁数の少いものですが、初めて能をみる方にも、そして観能数の多い方にもご満足のいただける充実した小冊子をめざして続刊してまいりたいと思います。そこで二百号を記念しかつ今日の編集方針を考える意味でも、多少増頁をして、観客の皆様からも評論を募集いたします。四百字詰原稿用紙五枚に纏めて四月二十日迄に銕仙会事務局までお送りください。

〈出演予定〉

3月24日(金) 淡交同人会(梅若能楽学院)
阿漕(銕之丞)

3月26日(日) 片山博太郎後援会(京都観世会館)景清(博太郎)海士懐中之舞(寿夫)

4月4日(火) 春秋会(水道橋能楽堂)
忠度(静夫)

4月15日(土) 観世能楽堂落成祝賀能 高砂 祝言之式(銕之丞)

4月19日(水) 国際能楽鑑賞会(水道橋能楽堂)恋重荷(銕之丞 ツレ真広)

繭の会〈予定番組〉

5月23日(火) 能 胡蝶 北浪 照雄
能 藤戸 山本 順之

7月28日(金) 能 雲雀山 若松 宏充
能 野守 浅見 真広

9月1日(金) 能 通小町 若松 宏充
能 玄象 山本 順之

11月24日(金) 能 野宮 浅見 真広
能 舎利 北浪 照雄

いずれも6時開演 於 観世能楽堂